

宮澤賢治が求めた光 ——法華文学としての「やまなし」——

Kenji Miyazawa's Search for 'Light' in His Exploration of the Lotus Sutra, "Yamanashi"

日置俊次

Shunji HOKI

一

本論考は、宮澤賢治の童話「やまなし」がはらむさまざまな謎を考察することを目的とする。長い間、国語の教科書（例えば光村図書の小学六年生『国語』）に採用され続けてきたにもかかわらず、教師たちがまともに答えることができない、多くの基本的な謎がこの作品には残されている。ヤマナシの実とは具体的にどのような実なのか、カワセミはふつう蟹を捕食するのになぜ食べないと父蟹は断言するのか、カワセミは目が赤くないのになぜ赤いと父蟹はいうのか、子蟹がなぜ二匹しかおらず、しかもなぜ歳が離れているのか、母蟹はどこにいるのか、冬眠するべき蟹たちがなぜ十二月に活動しているのか、夜行性なのに早く眠れという父蟹の指示は矛盾していないのかといった、いまだに説明のつかない疑問点が数多い。

こうした疑問点にざっと解説を加えていこう。まず蟹たちのところにヤマナシの実が落ちるが、その実を落としたのはどんな種類の本なのか、まだよくわかっていない。よくいわれるように、芳香性の果実を持つところからイワテヤマナシの木ということでかまわないが、イワテヤマナシには亜種が多くて、実際にはイメージが一つに定まらないところがある。ここは、実が小さな梨にそっくりなので一般にヤマナシと呼ばれることのある大裏白の木（オオウラジロノキ）と考えるとすっきりするであろう。オオウラジロノキには、直径三センチほどのナシ状果が十月ごろから熟れて、初期形で示される十一月、そして初出形で示される十二月にも実が落ちる。実には梨のように金のぶちが生じることがある。味は渋くて酸っぱくて、生食には不向きとされるが、果実酒は絶品だといわれる。あるいは実をしばらく水につけて熟成させると、あくや渋みがとれて甘くな

るといわれる。父蟹が食べるのをしばらく待つようにと子供たちに指示するのは、そのようなニュアンスを含んでいる。

父蟹は、震える子蟹たちに、飛び込んだできたものの目が赤かったかと尋ねるが、カワセミの眼は黒色であり、赤くはない。水中で見れば瞬膜のために白っぽく見える。ついでにいえば、カワセミの仲間のアカシヨウビンも、体は赤いが黒い目をしている。目が赤いというイメージは、何か感情の高ぶりにおぼれているような、あるいは死をもたらしものの不吉な予兆として、作中では機能しているが、実際に赤い目とがたくちばしをもつ鳥は、たとえばヒクイナやゴイサギであろう。しかし体ごと水に飛び込んで電光石火で魚をくわえていく鳥は、やはりカワセミしか思いつかない。父親は現場を見ていない。目が赤かったかという父蟹の質問は、その辺を確認したものとしても解釈できるであろう。しかし、いずれにしても父蟹はおおざっぱで、多少の誤りを犯しても平気であるように見える。父蟹は「そら、樺の花が流れて来た」という。樺はヤマザクラのこどだとされているが、ヤマザクラの花びらとオオウラジロノキの花びらが、素早く流れていくところを水の中から瞬時に区別できるかどうかは、疑問である。オオウラジロノキの花は白く、桜の花にそっくりで、開花期は五月である。父蟹がヤマザクラだと思った花弁は、実はあとから考えればヤマナシ、すなわちオオウラジロノキの花が散ったものだということがわかるように、賢治は物語を書いたのではあるまいか。あるいは白い花びらを漠然と樺の花びらと表現

しただけであったのかもしれない。ヤマナシの実が落ちた時もそうであったが、父はすべてを一瞬で洞察する完全な教師ではなく、あとから現実に気づくことも多い。オオウラジロの花はすでに五月に川を訪れていたのであり、それから太陽の力で枝に実が育ち、熟した後、もう一度、今度は果実という充実した姿で川を訪れてくるという繰り返しを、賢治は描き続けたものではなだろうか。その間に、子供たちも成長を遂げているのである。それは認識が不完全である父においても「気づき」をもたらし現象であり、そこには法華経信仰への改宗を拒む賢治の父宮澤政次郎へのやわらかなメッセー

ジも込められていたかもしれない。

蟹に関しての謎であるが、先ほども触れたように、ヤマナシの実が落下したとき、「お父さんの蟹は、遠めがねのやうな両方の眼をあらん限り延ばして、よくよく見てから」というところは、いかにも蟹らしい描写である。しかし「子供らの蟹は頸をすくめて」というのは、比喩表現であって、蟹にすくめる首はないのである。こうした現実と、人間的な表現がまじりあっているところに、この作品の面白さはある。サワガニの繁殖期は春から夏である。ひと月で雌のお腹にいる卵は孵化するが、小さな子供の蟹たちは、しばらく母蟹のお腹に束をなすように密集している。そのような蟹の繁殖の現実、民話の「さるかに合戦」などに生かされているが、この童話「やまなし」では閑却されている。蟹の子供たちは、お兄さんと弟という、人間のような家族構成で描かれている。弟が大きくなって

兄になり、兄が大きくなって父となる。父にもまた先達がいるという、循環をわかりやすく示している。学校でいえば、一年生の上には二年生があり、またその上の学年があり、そして先生がいるという感覚であろう。このとき、この蟹の親子は蟹ではなく、先生が父親であり、学校でこの幻燈を見ている生徒たちが子蟹と重なっているのである。魚が食べられてしまったが、おれたちはかまわないんだよと先生がいえば、生徒たちは蟹に感情移入しつつ、自分たちが魚でなくてよかったと思うだろう。つまり、生徒たちは、おそらく怯えを感じながら、同時に人間でよかった、カワセミに食べられることがなくてよかったという安堵の気持ちを抱くであろう。そういうニュアンスで、われわれのことは、カワセミはかまわないのだから安心していいよと、先生が父蟹の声を借りる形で、生徒に呼びかけている。幻燈室の闇の中では、語りを続ける先生がある意味で半分、素に戻って話をしているともいえ、映像世界と現実世界の境があいまいになっているのである。「さるかに合戦」では蟹の父が不在であるが、「やまなし」では子蟹たちのお母さんがいない。それは、お釈迦様を終着点として、その下に日蓮があり、その下に田中智學があり、そしてその下に賢治がありという、学びの場である「教室」というものの宇宙的多層的なつながりを強調したかったのである、もしそこに母が混じると、イメージが宇宙から一気に家庭というところに小さく収斂されてしまうことを、賢治は怖れたのではないだろうか。もちろんそこには、自身の持病である結核に感染させ

ることで妹トシを死なせてしまった母（またいずれは同じ病で賢治を死なせてしまうことになる母）に対する、賢治の複雑な感情がたゆたつてもいるのである。

しかし、「やまなし」における最も大きな謎は、作中の子蟹たちが「クラムボン」と呼んでいるものがいったい何なのか、そして「イサド」とはどんな場所を指しているのかという点であろう。それは、この「やまなし」という作品と賢治とのかかわりを明らかにするキーワードでもある。賢治はどのような意図をもって、この作品を執筆し、発表したのが、このキーワードによって明かされていると考えられるのである。

大正七年三月二〇日前後の保阪嘉内あて書簡で、賢治は「南無妙法蓮華経と一度叫ぶときには世界と我と共に不可思議の光に包まれるのです」と訴えている。賢治は生涯、この法華経という光を求め続けた。そして光を表す表現を作品の中に多用した。そうした光のイメージの中心にあるものを探っていけば、おそらく先に挙げた最大の問題を解き明かすることができるであろう。このとき、核心となる重要なイメージは「太陽」である。これまで、論考を重ねて私が主張してきたことは、この「太陽」の重要性である¹。そしてこの「太陽」のイメージは、ただ作品「やまなし」の読解に限定される問題ではなく、賢治文学一般におけるひとつの核心ともなる隠されたテーマなのである。

この論考では、私が過去の論文で指摘してきたことを前提として、

改めて「やまなし」の謎について整理し、考察をまとめなおしておきたいと思う。すでに論証を終えた問題に関しては、なるべく概括的に触れるにとどめ、必要な修正を加えていく。作品の全体像を失わないように注意しながら、「太陽」のイメージを中心として、問題点を相互に関連付けながら論じていきたい。

二

宮澤賢治は大正七年（一九一八年）三月、満二十一歳で盛岡高等農林学校を卒業する。四月より研究生となったが、徴兵検査を受けたり（第二種乙種で徴兵免除）、肋膜炎を患って静養したりするうち、八月に満二十二歳の誕生日を迎える²。弟の宮澤清六によると、大正七年の「この夏に、私は兄から童話「蜘蛛となめくちと狸」と「双子の星」を読んで聞かせられたことをその口調まではっきりとおぼえている³」という。すなわち宮澤清六は、このころ「蜘蛛となめくちと狸」「双子の星」などが初めての童話として賢治によって創作されたと証言しているのである。

大正十二年四月八日付の「岩手毎日新聞」に掲載された作品「やまなし」（初出形）は、大正七年ごろから十二年四月までの間に構想され、書かれ、あるいは推敲されたと考えてよい（発表後の推敲に関してはしばらく措く）。すべてがトシの死後に書かれた可能性も否定できないが、早くから第一次稿ができており、第二次、第三次と原稿が続き、度重なる手入れが行われたという順路をたどった可

能性もあろう。その上で、作品は大正十年以後に書かれたか、あるいは決定稿が作られたという仮説を立てておいても、間違いではない。理由は以下に述べるが、大正十年以降に何らかの意味で、作品が熟成されていたと考えることは自然であるからである。ヤマナシの実が落ちてきてもしばらく熟成の時間が必要で、それが待つこととおいしいお酒になるという作中に見える発想には、推敲癖のある賢治の創作の秘密が隠されているのかもしれない。とにかく、ここでは、「やまなし」誕生に深くかわる、大正十年から十二年までの二年ほどの間の賢治の状況を整理しておくことが必要となる。

童話「やまなし」に大きな影響を与えている出来事は、大正十年に賢治が家人に無断で上京し、鶯谷にある国柱会に奉仕しながら、法華経の教えに連なる文学の創出に従事する決意を固めたことであろう。法華経の内容を思想や表現にとりこんだ文学を執筆するということとは、ある意味では、当時の賢治が一身をささげて目指そうとしていた布教活動の一環ということになる。賢治のこの突然の上京を論じるためには、父との宗教をめぐる対立のほかに、それ以前に生じていた賢治と東京のかかわりと、電光石火のように無言で東京へ発つという勇気のいる行為に至った細かな経緯にも、まず目配りをしておかねばならない。

賢治は、大正九年十二月二日付の保坂嘉内あての手紙で、「今度私は／国柱会信行部に入会致しました。即ち最早私の身命は／日蓮聖人の御物です。従って今や私は／田中智學先生の御命令の中に丈

あるのです」と記している。同じ書簡には「妙法が実にはつきり働いてゐるのを私は感じ私は信じ私は仰ぎ私は嘆じ 今や日蓮聖人に従ひ奉る様に田中先生に絶対に従致します」とも書かれていて、その信仰の激しさが伝わってくる。そこには、前年の大正八年に田中の講演を「唯二十五分丈昨年聞きました」とも記されている。すなわち大正十年の上京以前に、賢治はすでに田中の肉声がある程度まとまった形で聞いていたことになるが、賢治と東京とのかかわりについて、そのあたりの事情から整理していこう。

ここには、東京の日本女子大学家政学部に在学していた妹トシが発熱して、大正七年十二月に永楽病院へ入院したという事実が関係している。⁽⁴⁾十二月二十六日、責善寮の寮監西洞タミノよりトシ入院の知らせが花巻につくや否や、賢治と母イチはその夜のうちに花巻を発ち、翌朝には上野駅に到着した。永楽病院に近い雲台館に宿をとって、献身的な介護に努めた。トシは翌大正八年二月に退院し、雲台館でしばらく休養をとった。一時帰花していた母イチと、叔母岩田ヤスが上京した。そして常に献身的に看病をしていた賢治にも見守られて、三月三日、ようやくトシは花巻へ帰った。トシは授業には出席不足ではあったのだが、この三月に日本女子大学は卒業証書を届けてくれた。なお、賢治やトシが泊まった「雲台館」という旅館の名前の象徴性が後で問題となるので、「雲」のイメージを記憶しておきたい。

大正八年に賢治が田中の講演を聞いたとすると、それは大正八年

の一月から二月にかけてである。トシが小康をとりもどしたところ、賢治は看病の合間を縫って、鶯谷の国柱会館へ出かけ、田中の講演を聞いたのであろう。国柱会が、上野桜木町（現JRの鶯谷駅近く）に国柱会館を建設し、落成式を行ったのは大正七年四月のことである。講演を聞いたのが「二十五分」であると、限られた時間が明示されていることから、賢治はトシのことが心配で、もっと長い講演を全部聞かずに、途中で看病へと戻った可能性も推察できるであらう。

賢治の心は、この時期から、ある意味で、トシと国柱会（田中智學）との間で揺れ続けていくことになる。それは花巻か東京かという、活動場所の選択肢とも重なっていく。トシと花巻に帰ってから賢治の脳裏には、家族のうちに自分の唯一の理解者であり、法華経信仰の同士でもあるトシのそばにいて、すなわち花巻にいてトシを看病する立場をとるのか、それとも上京して日蓮上人の化身とも思われる田中智學の身近にいて働くのか、そんな岐路が浮上してくる和思考えてよいのである。東京という場所が賢治にとってすでに身近な町になっていたのである。

花巻に帰ってから、トシは大正九年九月二十四日付けで母校花巻高等女学校教諭心得となつて、英語と家事を教えることになった。まさにこのタイミングで、同年十月に、賢治はとうとう国柱会に正式に入会する。トシが小康をとりもどし、ある意味において「独立」したことが影響を与えていたと考えられる。高知尾智耀「宮沢

賢治の思い出」(国柱会ホームページ掲載)によると、このころの賢治の次のような様子が伝わってくる。

彼が国柱会を知り、その創始者であり総裁であった田中智学先生を知ったのは彼が学生時代ならびに卒業後に、東京へ出て上野図書館にしばしば行った時、鷺谷にあった国柱会館に来た時からであろう。とにかく彼が妙法蓮華経々文を拝読して非常な靈感をうけ、それから進んで法華経の研究、そしてついに求道の熱情から信仰生活を欣求し、それをみたすために国柱会に入会することを決意し、彼の従弟で、親友であった関登久也氏を説きふせて、共に一躍国柱会の信行員の認可を申請してきたのである。

当時、国柱会中央事務所であった国柱会館で、国柱会統務会々長であった保坂智宙居士と、理事であった私とが、その願意を検討した結果、信行員の入会を承認し、御本尊妙法曼荼羅と、妙行正軌、宗章等を授与したのであった。いうまでもなく田中智学先生拝写の佐渡始頭の妙法曼荼羅であり、先生撰定の御修行の作法書、妙行正軌である。(中略)

賢治は国柱会信行員となるや、御修行を怠らなかつたばかりでなく、正しい信仰の広布に全力をつくした。すなわち父上をはじめとし、家族や親戚の人々、またあらゆる人々に対して機会あるごとに国柱会の正しい信仰を鼓吹したのである。田中智学先生の統裁される日刊『天業民報』を拝読後は、門前に掲示

板をつくって日々掲出し、田中先生著の各種の伝道用パンフレットを求めては、各方面に施本して精読をすすめた。また親戚および親しき人々と相会して御修行または信仰座談会をひらいた。そして彼自身は田中先生の著書はほとんどこれを読破し、なかならず『日蓮主義教学大観』を精読し、同じく先生監修の『類纂高祖遺文録』などの拝読を怠らなかつた。⁽⁵⁾

このような生活を続けていくうち、賢治のうちに燃えていた東京への志向は日増しに強くなつていったようである。大正十年一月二十三日の夕方四時半過ぎ、満二十四歳の賢治は家族に無断で、とうとう上京することになる。大正十年一月三十日付けの關德彌あて書簡では、その日の上野行き夜行列車へ飛び乗ることになった契機が次のように描かれている。

その時頭の上の棚から御書が二冊共ばったり背中に落ちました。さあもう今だ。今夜だ。時計を見たら四時半です。汽車は五時十二分です。すぐに台所へ行行って手を洗ひ御本尊を箱に納め奉り御書と一所に包み洋傘を一本持つて急いで店から出ました。

この「御書」とは、賢治愛読の靈長閣版『日蓮聖人御遺文』と、国柱会より出版された田中智学編『重訂照校類纂高祖遺文録』(大4・10)のことで、棚に並べておいてあつたこの二冊の厚い本が賢治の背中に同時に落ちてきたのである。⁽⁶⁾

上京した賢治は二十四日午後国柱会を訪ねる。賢治は田中智学

に会うことはできなかった。田中は眼病にかかり、面会謝絶の状態を続けていたからである。賢治は国柱会講師であり理事でもある高知尾智耀に出会う。「雨ニモ負ケズ」手帳の記載によれば、「高知尾師ノ獎メニヨリ 法華文学ノ創作」というメモがみられる。高知尾の勧めが賢治を法華経の文学たる童話創作に駆り立てたことは事実と考えてよい。それは必ずしも法華経、法華経と声高に叫び続ける文学ではなく、法華経の教えをいったん秘め隠して内在化した文学のことであった。本郷の文信社で校正や筆耕の仕事に就きつつ、国柱会で街頭布教や奉仕活動をしながら、賢治は爆発的な集中力で、多くの童話を書き継いでいく。「やまなし」はそのような経緯を経て、生み出された作品であると考えられる。

賢治は田中智學を目指して、ある意味ですべてを捨てるような気持ちで一心に上京したのであった。賢治が太陽のように仰ぐ田中は、いなくなったわけではないが、しかし国柱会から姿を隠していた。そこに賢治が見出そうとした「啓示」もまた、重要な意味を持つであろう。文語詩「国柱会」に、「大居士は眼をいたみ／はや三月人の見るなく」とも歌われているが、姿を隠してしまう太陽、いわば明滅する太陽が賢治に教えようとしていることは、何なのだろうか。そこに「妙法が実にはつきり働いてゐるのを」賢治は感じ、信じ、仰ぎ、嘆じていたのではなかっただろうか。

大正十年四月、対立を繰り返していた父が上京し、賢治と一緒に関西旅行をする。延暦寺や法隆寺などを廻って父と東京に帰り、父

を見送ったのは四月七日であった。賢治は四月八日の花祭りに、東大寺で誕生仏の微笑みに会うこともできたはずであったが、すれ違いとなってしまった。そうして迎えた釈迦の誕生日に、賢治は何か思うところがあったのではあるまいか。そして八月、賢治が二十五歳となる夏、トシ病気との電報が届く。賢治はすべてを捨てるようにして花巻に急いで帰郷する。トシを看病する傍ら、十二月には稗貫郡立稗貫農学校（のちの県立花巻農学校）教諭に就任し、生徒たちを受け持つことになる。教室が舞台となっている作品「やまなし」は、先生が生徒に語りかける形式をとっており、賢治が農学校の先生となってから創作された可能性も高い。

それまで幾たびも、宗教をとるか、トシをとるかという選択肢が胸裏に浮上した時、賢治はトシを最優先として考えてきた。あるいは考える間に体が先に動いてしまったといってもいいかもしれない。しかしそのトシが、大正十一年十一月二十五日にととう永眠してしまう。その悲しみの混迷から抜け出すことは容易ではなかった。そんな混迷のさなかに、賢治の一つの宣言として「やまなし」は発表されたと考えられるのである。しかし「やまなし」発表後も、賢治の悲しみは癒されることはなく、夏にははるばると北方の樺太まで水を渡る旅に出立することになる。^⑤

ヤマナシの実を水につけて渋みを抜くという発想は、たとえば『銀河鉄道の夜』の鷺の描写に生かされる。鷺は「天の川の水あかりに、十日もつるして置くかね、さうでなければ、砂に三四日うづめ

なけあいけないんだ。さうすると、水銀がみんな蒸発して、喰べられるやうになるよ」という。賢治も苦しみのさなかで、自身の涙み、怒りや不安というあくを海という水の広がりの中に抜こうとしたのであろうか。

「こんなたのしさうな船の旅もしたことなく／たゞ岩手県の花巻と／小石川の責善寮と／二つだけしか知らないで／どこかちがった処へ行ったおまへが／どんなに私にかなしいか」(「津軽海峡」一九二三、八、一)、「われわれが信じわれわれの行かうとするみちが／もしまちがひであつたなら／究竟の幸福にいたらないなら／いままっすぐにやって来て／私にそれを知らせて呉れ。／みんなのほんたうの幸福を求めてなら／私たちはこのまゝ、このまっくらな／海に封ぜられても悔いてはいけない」(「宗谷挽歌」一九二三、八、二)。こうした賢治の詩が、失なわれたトシを巡って賢治を包みこむ混迷を物語っているが、そんなときに、なにゆえか賢治は海(水)を求めたのである。「やまなし」に登場するイサドとは、こうした水辺のこと、あるいは海のことではなかっただろうか。

三

日蓮の遺文には「釈迦仏・法華経を説き給いしかば多宝仏・十方の諸仏・菩薩あつまりて日と月と星と星と鏡と鏡とをならべたるがごとくなりし時^⑨」といった表現が登場するが、釈迦が一つの太陽のような光として存在するというイメージは、だれにも首肯

されるところである。賢治にも、釈迦を描いた「ひかりの素足」という童話がある。「妙法蓮華経如来寿量品第十六」が呪文のように登場することでも明らかであるが、タイトルにある「光」とは釈迦のことである。大正七年五月十九日付けの保阪嘉内あての書簡で、賢治は「南無妙法蓮華経は空間に充滿する白光の星雲であります」と述べているが、こうした光群の中心に存在する太陽のイメージで、釈迦を捉えている。あるいは釈迦が太陽そのものなのである。日蓮はその太陽の子であり、いわば太陽の分身でもあると自認している。分身という発想は、太陽が他の星々を輝かせ、あるいは月を光らせるさまにも当てはめることができる。月を始め天井の多くの星々は太陽の分身たちだということができるのである。

大正九年十二月上旬の保阪あて書簡では、「絶対真理の法体 日蓮大聖人 を無二無三に信じてその御語の如くに従ふことでこれはやがて／無虚妄の如来 全知の正編知 殊にも 無始本覚三身即一の／妙法蓮華経如来即ち寿量品の釈迦如来の眷属となることであります」と賢治は断言しているが、賢治の内部で釈迦と法華経と日蓮がほぼ一体化していることがわかる。その一体化には田中智學も加わってくるのであるが、こうした一体化のイメージの中心に、「太陽」が存在すると考えられる。

もともと經典で、釈迦は「太陽の末裔」と呼ばれ、「日種」と表されることがある。釈迦族が太陽族であるのだが、釈尊の父の名は「浄飯王」、そのまま「淨い米飯」という意味である。父の弟たちも、

白飯、斛飯、甘露飯というように「飯」である。釈迦族は稲作を中心とする農耕を営んでいたことがわかる。例えば宮澤清六は、兄賢治の様子を次のように描いている。

私がいまも目に見えるようなのは、八月になると空の模様ばかり気にしていて、「困ったなあ。日が出ないかなあ。暑くないかなあ」といつていた兄の顔である。八月の開花期に、寒かったり雨ばかり続けば、必ず不作となるので、後に手帳に書いた「サムサノ夏ハオロオロアルキ」という言葉そのままのように兄は見えたのであった。¹⁰⁾

太陽を待つ心には、純粹に農業的な、収穫を心配するという理由だけがあったのではない。この太陽が、いわば釈迦如来そのものであったからである。「寿量品の釈迦如来の眷属となる」と賢治は述べていたが、賢治が最終的に敬っているのは妙法蓮華経であり、その化身たる釈迦如来である。そこに到達するためにまず日蓮へ絶対の信仰を捧げる。しかし日蓮とは現世にはお会いできないわけであるから、その分身たる田中智學に一身を捧げるという手順を踏む。ここには、先ほど述べたように、すべてを一体化して考える発想が見える。一体化であると同時に、手続きが何段にもまたがった数次的発想というか、重層的なヒエラルキーを思わせるシステムを前提とした発想が存在することがわかる。『法華経』自体が、釈迦の前世の姿をいかにも多様に語る経典であって、釈迦は変幻自在に姿を変えており、いったいどの時代に何人の釈迦がいるのかわからない

という結論になる。極言すれば世界が釈迦の痕跡に満ちているということになる。

少し比喩的に考えてみよう。例えば空手道に入門して白帯だった人間が、練習を重ねていくと級が上がっていく。次第に帯の色が変わっていく、やがて段をとって黒帯になる。そして自分が指導者になって下の者たちを指導すると同時に、さらに二段、三段と、上の段を目指して修行していく。このとき最高師範とは別に、日常指導を受ける先生や先輩というものがおり、その指導者たちの陣容や指導内容は少しずつ変化もしていくであろう。このように重層的な、段階を成しているシステムを「道」と呼ぶとすると、同じ人間に白帯だった時と青帯だったときと黒帯だった時の分身構造が生じることになる。

賢治は「道」に志して田中智學へ一身をささげるために国柱会へはせ参じたが、しかし田中智學が賢治の唯一の最終目標として存在しているのではなく、「道」は田中の背後にも続いている。田中もまた釈迦のところまでにいたる「道」の道標のひとつであるといえ、しかしある意味では釈迦の分身ということが出来る。釈迦の分身という話を進めて極論すれば、田中はお釈迦さまそのものであるのかも知れないということになる。この考え方が、のちに述べる常不軽菩薩品の発想とリンクするのである。

釈迦は永遠の昔からすでに如来になっており、如来であるゆえにあらゆる次元に姿を現すことができる。したがって、法華経はこの

世の過去現在未来に遍在しているのである。同時に、釈迦は長い長い修業を積んで何千億ともわからない無数の転生を繰り返しつつその如来の境地を得たとも述べているが、如来であることと菩薩であることはパラレル世界に同時的に生じていると考えてもよい。すべての衆生が救われなければ菩薩は如来になりえないのである。もちろん死ぬはずのない釈迦が入滅するのも教育的配慮に満ちた「方便」によるものである。そんな釈迦の姿はある意味で、永遠の昔から光を失わない不変の太陽の姿であり、しかし同時に毎日夜になると姿を隠してしまう太陽、ちよつとした雲にも隠れてしまうこともある太陽の、明滅する光としての二面性を有するイメージとして考えることができる。

賢治が農学校の教師となり、のちに肥料設計にも携わったように、賢治を取り巻いていた東北の環境では、農業というものが大きな意味を持っていた。農業にとって太陽が重要であることは論を俟たないが、例えば太陽はしばしば気まぐれを起こすように姿を隠して、冷害をもたらす。先に宮澤清六の文章を引いたとおりである。そのような明滅する太陽を、あらゆる観点から賢治は意識し続けていたといえるであろう。アインシュタインの来日は、トシの病臥の時期と重なってしまったが、相対性理論が明らかにした光の超現実的なふるまいとその絶対性の確立も、また賢治を鼓舞したことである¹⁾。賢治が花巻農学校教諭となるのは大正十年十二月であるが、翌年二月に学校の花巻精神歌を作り、知人に曲をつけてもらう。改行を省略

して引用する。

- (一) 日ハ君臨シ カガヤキハ／白金ノアメ ソソギタリ／ワ
レラハ黒キ ツチニ俯シ／マコトノクサノ タネマケリ
- (二) 日ハ君臨シ 穹窿ニ／ミナギリワタス 青ビカリ／ヒカリノアセヲ 感ズレバ／気圏ノキハミ 隈モナシ
- (三) 日ハ君臨シ 玻璃ノマド／清澄ニシテ 寂カナリ／サアレマコトヲ 索メテハ／白堊ノ霧モ アビヌベシ
- (四) 日ハ君臨シ カガヤキノ／太陽系ハ マヒルナリ／ケハシキタビノ ナカニシテ／ワレラヒカリノ ミチヲフム

例えば四番の「日は君臨し輝きの太陽系は真昼なり 険しき旅のなかにしてわれら光の道を踏む」という詩は、一見農業に従事するものたちを鼓舞する歌のように見えて、「光の道を歩む」というところに賢治の宗教的な実践への願いと祈りが隠されていると読むべきであろう。「光」はキリスト教でも「地の塩、世の光」(青山学院のモットーとなっている)というように、宗教的な意味を込めて多用される言葉である。例えば「光あるうち光の中を歩め」は、トルストイの短編小説のタイトルだが、この「光」や「道」にはキリスト教的な意味合いが含まれている。いずれにしても、賢治の内部には、「太陽」への宗教的な傾斜が認められるのである。

四

繰り返すが、賢治は父親と対立し、大正十年一月に東京へ無断で

飛び出していった。その一月中旬の保阪嘉内あて書簡で、賢治は次のように述べている。

実にこの様にして私は正信に入りました。龍ノ口御法難六百五十年の夜（旧暦）私は恐ろしさや恥づかしさに願えながら燃える計りの悦びの息をしながら、（その夜の沈む迄座って唱題しやうとした田圃から立つて）花巻町を叫んで歩いたのです。知らない人もない訳ではなく大抵の人は行き遭ふ時は顔をそむけ行き過ぎては立ちどまってふりかへて見てゐました。盛岡の農林学校では化学の一年が見学に来てゐてその一群にもあひました。向ふは校歌を唱つてゐたのです。その夜それから讃ふべき弦月が中天から西の黒い横雲を幾度か潜つて山脈に沈む迄それから町の鶏がなく迄唱題を続けました。

九月十二日は日蓮が龍ノ口で法難に会い、その後、酷寒の佐渡へと流罪にされることになる記念日である。その記念日に、賢治は日蓮のように、夜明けを待っている。さらに詳しくいえば、文永八年（一二七二年）ごろ、鎌倉の松葉谷草庵にいた日蓮は捕縛され、翌日九月十三日子丑の刻（午前二時前後）斬首にされかかったのである。その時の様子を、「種種御振舞御書」より引用する⁽¹²⁾。

江のしまのかたより月のごとく・ひかりたる物まりのやうにて辰巳のかたより戌亥のかたへ・ひかりわたる、十二日の夜のあけぐれ人の面も・みへざりしが物のひかり月よのやうにて人人の面もみなみゆ、太刀取目くらみ・たふれ臥し兵共おぢ怖れ・

けうさめて一町計りはせのき、或は馬より・をりて・かしこまり或は馬の上にて・うずくまれるもあり、日蓮申すやう・いかにとのばら・かかる大禍ある召人にはとをのくぞ近く打ちよれや打ちよれやと・たかだかと・よばわれども・いそぎよる人もなし、さてよあけば・いかにいかに頸切べくはいそぎ切るべし夜明けなばみぐるしかりなんと・すすめしかども・とかくのへんじもなし。

大正九年では、旧暦の九月十二日は新暦で十月二十三日にあたる。賢治が夜を明かしたのはこちらの十月の日付であろうか。文永八年（一二七一年）を基準とすれば、六百五十周年は一九二一年だが、概算で一九二〇年と考へてもかまわないし、国柱会などではこの年を六百五十年の記念日と公に定めていたのかもしれない。念のため、右の文章の現代語訳を試みておく。

（日蓮が斬首されかけた時）、江の島の方角から、月のように光るもので鞠のように丸いものが東南から西北の方角へと光つて動いていった。十二日の夜で日の上る前で暗く、人の顔も見えなかったが、丸いものが光つて月夜のようになったので、人々の顔もみんな見える。太刀取りは目がくらんで倒れ臥してしまい、兵士たちは怖気づいて、斬首する気もなく、百メートルばかり駆けて逃げる者もあり、ある者は馬から下りてかしこまり、また馬の上でうずくまったまま動けない者もいる。日蓮が「どうしたのか、おのおのがた、こんな大罪のある召捕人か

ら遠のいてしまうのか、近くへ寄って来いよ、寄って来いよ」と声高に呼びかける。しかし急いで寄ってくる者もない。「こうして夜が明けてしまったら、どうするつもりなのか、首を斬るなら急いで斬れ、夜が明けてしまったら見苦しくなるであろう」と斬首をすすめたけれども、どういう返事も聞かえない。

日蓮の上に現れた光源とは、月のようで鞠のようで丸く光るもので目がくらむものだという。とにかくクラムものであり、ボンのように丸いのである。それはいつてみれば、海のほうから、月の分身すなわち太陽の分身のようなものが現れたのである。そして太陽の子と呼ばれ太陽を示す名を持った日蓮の命を救ったのである。この光と闇のイメージは、日光の世界と月光の世界を二部構成で表した「やまなし」にも生かされていくのではないだろうか。

賢治はその法難の夜の日蓮を思いながら、「その夜それから讀ふべき弦月が中天から西の黒い横雲を幾度か潜つて山脈に沈む迄それから町の鶏がなく迄唱題を続けました」という。つまり月が雲を何度もくぐり、隠されたり現れたりを繰り返しており、そしてついに月が山に沈み、朝日が昇るまで、唱題を続けたというのである。

例えば詩集『春と修羅』の中の、「有明」という詩（一九二二、四、一三）は「やまなし」発表のちょうど一年前の四月に書かれたものであるが、「有明」というタイトルに如実に示されているように、夜明けを描いた作品である。

起伏の雪は／あかるい桃の漿をそそがれ／青ぞらにとけのこる

月は／やさしく天に咽喉を鳴らし／もいちど散乱のひかりを呑む／（波羅僧羯諦 菩提 薩婆訶）

夜が明けて、ある意味で太陽が月と入れ替わる直前の感覚が描かれているが、太陽そのものはまだ完全に顔を現していない。陽光が譬えられる桃の汁にはギリシャ神話で神々が飲む不老長寿の酒ネクターのような気分があり、雪がおいしいかき氷のようにも見えてくる。賢治が臨終前のトシに運んだあのみぞれも思い出されてくるであろう。さて、桃の「しる」というときの漿（こんず）は日蓮も用いている言葉で（『秋元御書』）、重湯や酒や果汁などのおいしい飲み物を指している。「やまなし」の中で、川に落下してきた果実がおいしいお酒になると父蟹がいうのも、太陽のしづくがネクターや漿（こんず）に変容するというニュアンスがあるだろう。「波羅僧羯諦菩提薩婆訶」は「般若心経」の終わり近くに登場する呪文で、「悟れる者よ幸いあれ」という程度の意味である。「ハラサムギャテイボージュソハカ」というルビは、漢訳にみられる音訳より、サンクリット語に近い読みであろう¹³。

長詩「オホーツク挽歌」（一九二三、八、四）では、「南無妙法蓮華経」を同じ調子でカタカナで書き記している。だいたい「ナモー・サッダルマ・ブンダリーカ・スートラ」というような発音に近くなるところであろうが、賢治の表記にはやや癖がある。

爽やかな苹果青の草地と／黒緑とどまつの列／（ナモサダルマ・ブンダリーカ・スートラ）／五匹のちひさないそしぎが／海の

巻いてくるときは／よちよちとはせて遁げ／（ナモサダルマブ
フンダリカサストラ）

この「南無妙法蓮華經」の七字をお題目と呼ぶが、「樺太鉄道」（一九二三、八、四）でも、やはりお題目のサンスクリット語的カタカナ表記がみられる。法華經という言葉をダイレクトに表現せず、ある意味で隠しておきたいという賢治の欲求がそこには見られるのである。このカタカナ表記を確かめるために詩の一節を引用してお

くが、特に、ここに描かれる太陽の扱いにも注目しておきたい。

太陽もすこし青ざめて／山脈の縮れた白い雲の上にかかり／列車の窓の稜のひととこが／プリズムになつて日光を反射し／草地に投げられたスペクトル／（雲はさつきからゆつくり流れてゐる）／日さへまもなくかくされる／かくされる前には感応により／かくされた後には威神力により／まばゆい白金環ができるのだ／（ナモサダルマブフンダリカサストラ）

重要なのは、この詩で太陽が雲に隠されているということである。例えば『春と修羅』第二集の「丘陵地を過ぎる」（一九二四、三、二四）でも、「どうだ雲が地平線にすれすれで／そこに一すぢ白金環さへつくつてゐる」とあって、同じテーマが扱われている。また、第二集にある無題の詩（日付は一九二四、四、二〇）は、「やまなし」発表から一年後の四月に書かれたものである。天子と呼ばれているのは、太陽のことである。改行を省略して引用する。

東の雲ははやくも蜜のいろに燃え／丘はかれ草もまだらの雪も

／あえかにうかびはじめまして／おぼろにつめたいあなたのよるは／もうこの山地のどの谷からも去らうとします／ひとばんわたくしがふりかへりふりかへり来れば／巻雲のなかやあるいはけふる青ぞらを／しづかにわたっていらせられ／また四更ともおぼしいころは／やゝにみだれた中ぞらの／二つの雲の炭素棒のあひだに／古びた黄金の弧光のやうに／ふしぎな御座を示されました／まことにあなたを仰ぐひとりひとりに／全くことなつたかんがへをあたへ／まことにあなたのまどかな御座は／つめたい火口の数を示し／あなたの御座の運行は／式にしたがつてたがはぬを知って／しかもあなたが一つのかんばしい意志であり／われらに答へまたはたらきかける、／巨きなあやしい生物であること／そのことはいましくの胸を／あやしくあらたに湧きたゝせます／あゝあつき近くの雲が凍れば凍るほど／そこらが明るくなればなるほど／あらたにあなたがお吐きになる／エステルの香は雲にみちます／お、天子／あなたはいまにはかにくらくなられます

先ほども述べたように、明らかに太陽を描いた詩であるが、重要な点はやはり太陽が雲に隠されることである。太陽はにわかに暗むのである。こうした構図はあまりにも多くて、すべての例を列挙することはできないし、またその必要もないであろうが、同じく『春と修羅』第二集から「嬰兒」（一九二四、四、一〇）を引用してみよう。なにいろをしてゐるともわからない／ひろおいそののひととこ

で／縁のまばゆい黒雲が／つぎからつぎと爆発される／（そらたんぽぽだ／しっかりとて）／それはひとつづついぶった太陽の射面を過ぎて／いっぺんごとにおまへを青くかなしませる／……そんなら雲がわるいといって／雲なら風に消されたり／そのときどきにひかたり／たゞそのことが雲のころといふもののだ……

こちらの詩では太陽よりも雲のほうに重点が置かれた描き方になっている。⁽¹⁾ 童話「山男の四月」で、「ゼンたい雲といふものは、風のぐあひで、行つたり来たりばかりと無くなつてみたり、俄にまたできたりするもんだ。そこで雲助とかういふのだ。」という雲をめぐる思索が語られているが、読者は、それが太陽を覆い隠す存在であるという点に注意を向けなければならない。

あとはいくつかの例示にとどめるが、「春と修羅」第一集に話を戻すと、例えば「日輪と太市」では「日は今日は小さな天の銀盤で／雲がその面を／どんだん侵しかけてゐる」というように、太陽が侵すという構図が現れる。「小岩井農場」パート四には、「雲はけふも白金と白金黒／そのまばゆい明暗のなかで／ひばりはしきりに啼いてゐる／（雲の讃歌と日の軋り）」という、のちに引用する「おきなぐさ」のような世界が展開している。「青い檜の葉」には、「雲がちぎれて日ざしが降れば／黄金の幻燈 草の青」「雲はくるくる日は銀の盤」「雲がきたかまた日がそそぐ」「雲がちぎれてまた夜があけて／そらは黄水晶ひでりあめ」「かげとひかりの六月の底

／気圏日本の青野原」といった表現が連なっている。賢治の詩では、雲を太陽がくぐっていくこと、雲から太陽が顔を現すこと、あるいは夜明けがくること、日が昇ること、そんなかげとひかりの光景が繰り返し歌われていくのである。

五

「やまなし」が発表された大正十二年の四月八日からちょうど一年前の花祭りの日に、賢治は何を考えていたのだろうか。それは詩集『春と修羅』の中心となるべき詩である「春と修羅」を読めばわかる。この詩はその日付（一九二二、四、八）を持っているからである。そしてこの詩では、いったい何が描かれているだろうか。

いかりのながさまた青さ

四月の気層のひかりの底を

唾し はぎしりゆききする

おれはひとりの修羅なのだ

（風景はなみだにゆすれ）

碎ける雲の眼路をかぎり

れいろうの天の海には

聖玻璃の風が行き交ひ

ZYPRESSEN 春のいちれつ

くろぐろと光素を吸ひ

その暗い脚並からは

天山の雪の稜さへひかるのに

(かげろふの波と白い偏光)

まことのことばはうしなはれ

雲はちぎれてそらをとぶ

ああかがやきの四月の底を

はぎしり燃えてゆききする

おれはひとりの修羅なのだ

日の光が輝く四月、「法華経」の真の教えのことばが失われたかのように、雲がちぎれて碎け、目路を限っている。賢治は、三毒の一つと言われる怒りに侵されている自分を修羅道に堕ちたものとして告発している。その際に、太陽と雲がしのぎを削って動くさまを、賢治はわざわざお釈迦様の誕生日に記しているのである。「まことのことばはうしなはれ／雲はちぎれてそらをとぶ」という言葉に秘められた苦い思いは、しかしただ雲の存在を憎んでいるのではない。碎けてちぎれる雲の存在を、ある意味ではわがことのように受け入れているのである。そこには童話「おきなくさ」の世界にも通じる構図がある。これはうずのしゅげの兄弟たちが空を見上げるようにして話をしているのである。

まばゆい白い雲が小さな小さなきれになって碎けてみだれて、空をいっぱい東の方へどんどんどん飛びました。

お日さまは何べんも雲にかくされて銀の鏡のやうに白く光ったり、またかがやいて大きな宝石のやうに蒼ざらの淵にかかっ

たりしました。

山脈の雪はまっ白に燃え、眼の前の野原は黄いろや茶の縞になつてあちこち掘り起こされた畑は鳶いろの四角なきれをあてたやうに見えたりしました。

おきなくさはその変幻の光の奇術の中で夢よりもしづかに話しました。

「ねえ、雲がまたお日さんにかかるよ。そら向かうの畑がもう陰になった」

「走つて来る、早いねえ、もうから松も暗くなった。もう越えた」

「来た、来た。おおくらい。急にあたりが青くしんとなった」

「うん、だけでもう雲が半分お日さんの下をくぐつてしまつたよ。すぐ明るくなるんだよ」

「もう出る。そら、ああ明るくなった」

「だめだ。また来るよ、そら、ね、もう向かうのポプラの木が黒くなったらう」

「うん。まるでまわり燈籠のやうだねえ」

「おい、ごらん。山の雪の上でも雲のかけがすべつてるよ。あすこ。そら。ここよりも動きやうがおそいねえ」

「もうおりて来る。ああこんどは早い早い、まるで落ちて来るやうだ。もうふもとまで来ちゃった。おや、どこへ行つたんだらう、見えなくなつてしまつた」

「不思議だねえ、雲なんてどこから出て来るんだらう。ねえ、西のそらは青じろくて光ってよく晴れてるだらう。そして風がどんだん空を吹いてるだらう。それだのにいつまでたっても雲がなくならないぢやないか」

「いいや、あすこから雲が湧いて来るんだよ。そら、あすこに小さな小さな雲きれが出たらう。きつと大きくなるよ」

「ああ、ほんたうにさうだね、大きくなつたねえ。もう兎ぐらある」

「どんだんかけて来る。早い早い、大きくなつた、白熊のやうだ」

「またお日さんへかかる。暗くなるぜ、奇麗だねえ。ああ奇麗。雲のへりがまるで虹で飾つたやうだ」

ここに、雲をくぐるように明滅する太陽が描かれ、それを花の兄弟たちが賛美している構図は明らかである。雲をくぐり走馬灯のように変幻する太陽の光が、美しい奇跡のように思われてくる場面である。雲は決して悪なのではない。雲が雨を降らせるから、花は育ち、花として咲くことができる。そして最後には、花の兄弟たちは、太陽を信じながら、種となって再生のために空に舞い上がっていく。このような発想は、詩や童話に限定されることなく、賢治の書簡にもしばしば表れる。大正七年十二月十日ごろ保阪嘉内あての書簡を引用してみよう。

けれどもあの銀河がしらしらと南から北にかゝり、静かな裾野

のうすあかりの中に、消えたいまつを吹いてゐたこと、そのたいまつは或は赤い小さな手のひらのごとく、あるひはある不思議な花びらのやうに、暗の中にひかつてゐたこと、またはるかに沼森といふおちついた小さな山が黒く夜の底に淀んでゐたことは、私にこゝろもちよい静けさを齎します。

さてまた、あけがたとなり、われわれは、はや七合目の大きな赤い岩の下にたどりつき、つめたい赤い土に腰をおろし、東だか、北だかわからないそらを見れば、あゝこれは明るい冷たい琥珀の板で上手に張られ、またはこれは琥珀色の空間であつて夢の様な中世代の大とかげらがうかびたち、また頂にゐたり、一人の人は感激のあまり皮肉のあまりゲートルを首に巻きつけ、また強い風が吹いて来て霧が早く早く過ぎ行きわたくしの眼球は風におしつけられて歪み、そのためかまたはさうでなく本統にか白い空に灼熱の火花が湧き、すみやかに散り、風を恐れる子供は私にすがりついたのです。(中略)

雨がふり出しわたくしどもはかけながら柳沢にもどり火をたいて暖まってゐるうちに東のそらはひろうどのやうにひかりだしもう明るくなつたとき私共はまた外へでました。(中略) 勝手にわたくしのきもちのよいことばかり書きました。

ここで賢治は「わたくしのきもちのよいことばかり」書いたという、その賢治にとつての気持ちの良いこととは何であつたのだろうか。それはいうまでもなく、夜が明けること、東の空が明るくなる

ことへの喜びであり、その喜びは繰り返し描かれている。夜明けに至る前には、銀河の広がりがあり、また霧が出たり雲が広がったり雨が降ったりするが、そのうち、「東のそらはびろうどのやうにひかりだしもう明るくな」るのである。この文章には、太陽を待ち望む気持ちがあり、同時にその太陽が隠されているという印象がある。そこが重要な点である。

それは長詩「心象スケッチ外輪山」にも言えることである。「心象スケッチ外輪山」は、大正十一年九月十七日夜に、花巻農学校の教え子たちを引率して、賢治が月の光を頼りにしながら岩手山に登山する様子を描いている。「お日さまはあすこらへんで拝みます」と賢治はいい、みんなで日の出を待っているのだが、太陽が昇る直前で詩は終わっている。この詩が掲載された新聞の読者は、なぜ太陽が隠されているのかといぶかるかもしれない。大正十二年の花祭りの日（釈迦の誕生日）の新聞である。その太陽に関する読者の疑問がとけないまま、続いてこの論考で問題になっている童話「やまなし」が始まるように、紙面が構成されているのである。「やまなし」は隠された光源である太陽を迎えるための作品である。そのために、舞台設定として幻燈という、暗室で行われる光の変幻の世界が用意されているのである。

六

「雨ニモマケズ」の詩において、「サウイフモノニワタシハナリ

タイ」という祈りには、先ほど「春と修羅」の詩で見たような、三毒あるいは三不善根とも呼ばれる三つの煩惱である貪・瞋・癡（とん・じん・ち）を脱しようとする賢治の意思が織り込まれている。

「慾ハナク」「決シテ瞋ラズ」「イツモシツカニワラツテキル」「ヨクミキシワカリソシテワスレズ」という表現は、明らかに賢治の目指すところを述べているものである。そしてその理想のモデルとして、「ミンナニデクノボートヨバレ」るとき存在、常不輕菩薩が意識されていることは、今までも多くの指摘が重ねられており、これは定説となっている。⁽¹⁵⁾

「法華経」の「常不輕菩薩品」によると、常不輕菩薩は、すべての人が菩薩の修行をして必ず仏となると考えて、会う人々の仏性を合掌礼拝した。しかし人々は彼を誹謗迫害した。常不輕菩薩は命終したのち、二千億の「日月燈明如来」に会って法華経を学びまた法華経を説き続け、さらに二千億の「雲自在燈王如来」という仏に値遇し、法華経を学びそして説き続けた。このようにして常不輕菩薩の六根は清浄となり、仏の境地を得た。これが釈迦の前世の一つの姿である。⁽¹⁶⁾

「法華経」のこの記述のうち、不思議に思われるのは、常不輕菩薩が出会った二千億の「日月燈明如来」という如来の名前、そしてその後に出会った二千億の「雲自在燈王如来」という如来の名前である。なぜ同じ名前が繰り返されるのか。日月燈明如来は、序品でも登場しており、「法華経」を釈迦と同じように説く姿から、それ

は釈迦の分身であろうと思われるのである。「燈明」が「やまなし」の幻燈世界を想起させるとして、「日月」は太陽と月、昼と夜を思わせるであろう。そして「雲自在」とは、そんな太陽や月を自在に隠してしまう雲を思い出させるであろう。

常不輕菩薩は、わざわざ二千億の太陽と月（繰り返される毎日を表しているだろう）に法華經を学び、そして二千億の雲（自在に流れ、繰り返す太陽や月を隠してしまう）にも法華經を学んだ。この「日月燈明如来」と「雲自在燈王如来」は同じ如来だともいわれているが、両如来は無数の分身構造を持つていることから考えても、やはり釈迦如来の変化した姿であると思われる。

このような「法華經」の教えを前提にして、お釈迦様である太陽を中心として、その分身たる月と、太陽を隠す雲とを配した作品が、「やまなし」などではあるまいか。お釈迦様の存在と教えを、それとはわからない形で賢治は作品の中に隠したのではあるまいか。

作中に現れるクラムボンについては、水中生物や泡といった説が提出されている。クラムボンという言葉のもたらす感覚をよく考えてみると、まず「クラム」には、目がくらむまぶしいものというイメージがある。それから時々光が暗む、暗くなるという意味も派生する。「ボン」には、鈍くて丸いものをさす「ぼんぼ」という方言を考えてもいいし、「盆のような月」という表現を考えても良いが、丸い感覚をもたらず音であろう。すなわち「クラムボン」とは、ぼんやりとまるいもので、目がくらむようなまぶしいものである。そ

れから時々暗くなるのである。水中から見て、水面に見える太陽は波に揺られて、波と共に跳ねたりゆがんだり、笑っているように見える。雲に隠れて（殺されて）時々暗くなるが、またよみがえってくる。花祭りの誕生仏が、甘茶を浴びて金色をいつも笑っているように、クラムボンも金色に微笑む光なのである。そしてそれは、お釈迦さまそのものでもある。

田中智學は賢治の上京直後に聖史劇脚本『佐渡』を出版した^⑪。その『佐渡』の舞台を賢治も観劇している。日蓮を理解するために、その佐渡法難が重要であることはいうまでもない。佐渡に流される前に、日蓮は何度も法難にあっているが、法難は海と深いつながりがある。イサドとは日蓮が流刑にされた伊豆以東、佐渡という海にまつわる地域をまとめた言葉ではないだろうか。「いわて」を「イーハトブ」といい換えた賢治である。イズ・イトウ・サドと繰り返していれば、そのような合成語は自然に立ち上がってくるであろう。それは英語のシーサイドの音の組み換えにもなっており、海を連想させる語感を賢治が選んだのであろう。子供たちを大きな水の広がりに入れて行き、世界を見せてやろうという父蟹の教育的配慮がそこにあり、その真相には日蓮の法難の意味をよく考えなさいという賢治の思いが隠されている。

先にも触れているが、クラムボンにはアメンボや昆虫や魚や、あるいは泡であるといった根強い仮説が存在して、クラムボンに関する混乱を招いている。アメンボは笑わないし、あまり跳ねることも

ない。魚もまた死んでも生き返らない。泡も死んだら生き返ることがない。新たに生まれるだけである。特に泡は数が多く、消える泡、生まれる泡もすべて同時発生的であり、個別に論じることの意味はない。いつもしずかに笑っているように見えるもの、死んでも生き返る唯一最高のもの、あるいは死んだように見えても死んでいないものといえば、賢治の脳裏に浮かぶものはお釈迦様である。あるいは太陽である。この世界にとって最も必要なものである。わざわざ暗室で光の存在を消してからそれを暗示する幻燈という作品の枠組みにも、もちろん効果が期待されているのである。賢治が何を伝えたいと願っていたか、そこから議論を始めなければならぬであろう。

太陽は刻々と位置を変える。水が小さな滝をなしかぶかぶと音を立てながら落ちているところを通るであろうし、波の跳ねているところを通るであろう。水の中は揺らぎの世界であるが、光は変幻しながらも、そこにやすやすと降り注ぐ。子蟹たちは、この光景を笑ったととらえているのである。鈍い丸さをもつまゆい光、目がくらむような光であるクラムボンは、そこに存在している間、笑い続けるのである。それは甘茶に濡れて光る黄金の誕生仏のような笑いであろう。また、まぶしいものをみれば、だれもが笑ったような顔になるであろう。しかし雲によって隠されると、光は見えなくなる。急に消えてしまう。死んだ、殺されたという状態になるのである。そして雲が切れていけば、また太陽は笑うのである。

『クラムボンはわらつたよ。』

『わらつた。』

にはかにバツと明るくなり、日光の黄金は夢のやうに水の中に降つて来ました。
(初出形)

この部分がクラムボンの説明になっていると賢治は考えていたと思われる。ここで謎があきらかになるものと考えたのである。急に暗む太陽が、また雲から顔を出したと子蟹たちに言わせているのである。ここを無心に読めば、明るくなったことが笑ったことだという比喩の正体であり、すなわち明るくなったのは雲から太陽が出てきたせいであると、暗室の子供たちには理解できると賢治は考えていた。そしてそれは正しい。なぜなら私が小学生の時、教室で初めてこの作品を読んだときに、クラムボンは太陽だとはっきりと感じたからである。私はいま、ただその小学生の時のイメージをここに生硬な言葉で分析しているのに過ぎない。クラムボンが笑ったという子蟹たちの判断と、日光が降ってくるのはほとんど同時である。『春と修羅』の詩「第四梯形」(一九二三、九、三〇)でも「あやしいそらのバリカン／白い雲からおりて来て」「やまなしの匂の雲に起伏し／すこし日射しのくらむひまに／そらのバリカンがそれを刈る」という一節があり、暗くなってしまう太陽とやまなしのつながりが垣間見える。ここで陽射しがぐらくなるのは、雲が流れるからである。光ったり暗くなったり、変幻する太陽をクラムボンと子蟹たちが呼ぶとは、なんとという親近の情であろうか。それはある意味

で、無心にお釈迦様と共生している子供たちの様子を映し出しているともいえるのである。

太陽がもたらす甘い（しばらく待てば甘くなる）ヤマナシの実は、子供たちが花祭りに誕生仏の笑顔に降り注いだ甘茶の返礼とも考えられるであろう。しかし、ヤマナシはそのままでは実は甘くないのである。それぞれが自分で渋みをとろうとして、水に漬けおき、実の熟成を果たさなければならぬ。お釈迦様の教えも同じように自分でよく考えて、よく見聞きしわかり、そして忘れず、それを熟成させ、血肉化することが必要になる。すなわち、この作品「やまなし」に隠されている「太陽」を見つけ出すことも、また読者に課せられた「道」の発見のひとつとなるのである。

賢治は浄土真宗から日蓮宗に改宗した。改宗すると、それまではとんど何も考えずに毎日のお勤めでおこなっていた読経の質が大きく変わる。通常、浄土真宗で読みあげる言葉は、光に満ちている。サンスクリット語の「アミターバ」は無量の光と訳されることがあるが、阿弥陀とは無限で不変の光である。阿弥陀の空間とは常に輝きに満たされた光の世界で夜も昼もない。たとえば『正信偈』の一節を引用してみよう。「普放無量无边光 無碍无对光炎王 清浄歓喜智慧光 不断難思無称光 超日月光照塵刹 一切群生蒙光照」とあるが、光という文字が繰り返されて、光そのものが讃美されていることは明らかである。その光と同化することがここに歌われている。しかし、『法華経』を読むとき、おびただしい「光」はいつた

ん表層から消えてしまう。例えばよく読経される「方便品」には光という文字はない。そして読経の中心となるべき「自我偈」（「慧品」）には、「光」という文字は途中で一度現れるばかりである（「慧光照無量」）。そしてそれは、雲間からようやく太陽が顔を表したように感じられるのである。

例えば姉崎正治『法華経の行者日蓮』（博文館、大4・6）の表紙は、下部に蓮の浮く水の水紋が描かれ、上部には雲から顔を出す金色の太陽が描かれている。「日」と「蓮」を配した「日蓮」的図案であることは一目瞭然である。田中智學編纂の『重訂照校類纂高祖遺文録』でも同じ発想がみられるが、これは当時の日蓮に関する本の基本的な装丁であるといってもよい。美術的な視点から見ると、太陽が雲から顔を出すという発想には、お能に用いられる勝ち修羅扇（松に日の出）、負け修羅扇（海に日の入り）の図案も透けて見えるが、いずれにしても太陽が強く意識されていることがわかる。こういう本を手もとに置いて常住坐臥に見ていると、太陽が雲から顔を出すという構図や意味があまりにも当然となり、賢治の内部で堅牢なものとしてイメージ化されていくであろう。「やまなし」に「クラムボン」の懇切な解説がないのはそういう理由にも拠るのである。しかし、いずれにしても、賢治はクラムボンの意味を、読者に自分で考えさせようとしたのである。

「やまなし」が発表された日が花祭りの日であることは、偶然ではありえない。賢治がそう仕組んだのである。そして花祭りの日に

誕生仏を見ればはつきりわかることであるが、お釈迦様は金色で天を指し、地を指し、笑っている。太陽と雲と、そして水の中の蟹を見よと言っているようである。日光の金が降ってくるということ、金色のやまなしが降ってくるということの根源には、金色のクラムボンが存在する。賢治はそのような金色をした世界の根源を、釈迦あるいは妙法蓮華經と呼ぼうとしたのではないか。雨にも負けず、風にも負けず、いつも静かに笑っているのは、お釈迦さまである。釈迦は雲に隠れても実はわれわれを見守りながら笑っているのである。あるいはそのあたりのお寺の誕生仏には、金が剥けてしまった黒いお釈迦様の像も多くあるだろう。お釈迦様には光と陰がある。お釈迦様は暗む。しかし、そう見えるだけであり、本質は普遍の光なのである。賢治はそういう光になりたいといっている。常不輕菩薩のようになりたいといっている。つまりお釈迦さまのようになりたいといっているのである。そして常不輕菩薩の言葉を信じるならば、賢治はお釈迦様のようなのである。

本論考ではこれまで主に詩を中心に採り上げてきたが、雲や霧から太陽が昇ることは、賢治の童話の重要な枠組みでもある。そこをこれからひとつずつ地道にとらえなおしていかなければならないだろう。例えば「そのとき霧の向ふから、大きな赤い日がのぼり、羊歯もすぎごけもにはかにぱつと青くなり、蟻の歩哨は、また厳めしくスナイドル式銃剣を南の方へ構へました」（「朝に就ての童話的構図」）、「太陽はいつか又雲の間にはひり太い白い光の棒の幾条を山

と野原とに落します」（「チュウリップの幻術」）、「そして林は度十の居た時の通り雨が降ってはすき徹る冷たい雫をみじかい草にポタリポタリと落としお日さまが輝いては新らしい奇麗な空気をさはやかにはき出すのでした」（「度十公園林」）という、様々な童話の最終行に現れる太陽は、当たり前のようにそこに居ながら「本当のさいはひが何だかを教へる」（「度十公園林」）存在なのではないだろうか。宮澤清六は、若き日の賢治と法華經との出会いについて、次のように証言する。⁽¹⁸⁾

いよいよ受験準備に取りかかった賢治に、その夏特筆すべきことが起った。それは父が常に宗教のことで尊敬していた高橋勘太郎という人から父に贈られた国訳妙法蓮華經を賢治が読んだということである。

この本は前年から賢治が説教を聞いていた浄土真宗の島地大等の編輯したもので、その中の「如来寿量品」を読んだときに特に感動して、驚喜して身体がふるえて止まらなかつたと言う。後年この感激をノートに「太陽昇る」とも書いている。以後賢治はこの經典を常に座右に置いて大切にし、生涯この經典から離れることはなかった。

確かに賢治は、自らのうちに上った太陽を手放すことはなかったのである。賢治は生涯、作品の中に太陽の光を隠し、そして同時にその光を求め続けたといつてよいのではないだろうか。

(注)

(1) これまで論文「宮澤賢治試論——「やまなし」をめぐって」(『国語と国文学』平成十・三)、「宮澤賢治「やまなし」再論」(『青山語文』平成二五・三)、「宮澤賢治論——『法華経』受容における「太陽」のイメージ——」(『青山語文』平成二六・三)、「宮澤賢治論——「雪渡り」から「やまなし」へ——」(『青山語文』平成二七・三)で、太陽の重要性について詳述してきている。また、本論考の骨子は、二〇一五年十月十日に青山表参道の善光寺で催された文化講演会で私が行った講演「賢治が求めた光」で話をした内容と同じである。最近「クラムボン」の意味は問う必要がなく、自由に想像すればよいという判断停止を誘う意見が大勢を占めつつあるのではないか。例えば、白石秀人『異次元夢旅行 宮澤賢治のリアルをはしる』(春風社、平成一六・四)は、「クラムボン」について「各自が感じ取れるものなら何でもよい」(一三二頁)と断じる。しかし、「クラムボン」は、無数のクラムボンと響き合い、壮大な「いのち」を交響させる透明な反響体だ」(二四八頁)、「クラムボンは、「いのち」を宿す全ての奥底に等しくいて、「偶然」にやさしくひらかれ、そこで「奇跡」を呼び込み、時に深い神秘の領域にいざなう何ものかだ」(二四九頁)と述べている。その場合、「クラムボン」は太陽であり、さらにいえば、法華経に描かれている釈迦以外には考えられないだろう。

(2) 賢治は明治二十九年、すなわち一八九六年八月二十七日生まれである。

(3) 宮澤清六「兄のトランク」(筑摩書房、昭和六二・九)二二四頁参照。

(4) 東京帝国大学医学部付属病院小石川分院は、一八九七年に内務省医術開業試験場として設立されたときは東京市麹町区永楽町一丁目にあり、永楽病院という名がついた。一九〇三年に文部省へ移管され、一九〇八年には小石川区雑司が谷百二十番地、現住所表示では文京区目白台三丁目二十八・六に移転した。一九一七年すなわち大正六年に東京帝国大学へ移管、医科大学附属医院分院となった。なおトシが在学していた日本女子大学及び生活していた責善

寮のあるキャンパスは、現文京区目白台二丁目八・一である。すなわち小石川分院は日本女子大学の近所にある東大付属病院であった。雲台館は現在の文京区目白台三丁目四・七である。

(5) 国柱会ホームページに、故高知尾智耀講師「宮澤賢治の思い出」として掲載されている文章から引用した。

(6) 賢治の上に落ちて来た「御書」については、「縮刷遺文」のことだとされているが、森山一「宮澤賢治の詩と宗教」(真世界社、昭和五三・六、三三頁)は「御書というのは、田中智字編纂の『類纂高祖遺文録』であったように思われる」と指摘する。しかし『縮刷遺文』か『高祖遺文録』かのどちらか一冊だったのではなく、棚から二冊が同時に落下したところが重要なのである。

(7) 父の政次郎は、賢治があまりに意固地に法華経や日蓮宗にこだわるので、その心をほぐそうとして、伊勢から京都・奈良への旅に誘ったと思われる。直接、日蓮という餌で賢治を釣ることはしなかったが、比叡山延暦寺で伝教大師千百年遠忌が行われるなどといったことを口実にしたらしい。四月二日ごろに出発した日程はやや強行的で、伊勢神宮や延暦寺や法隆寺には寄ったが、東大寺には寄らなかつたようである。七日に東京に帰り、賢治は父を見送ったので、八日の東大寺の花祭りは見逃したことになる。東京を歩いていれば、どこかの寺で必ず花祭りを行っているところを通るであろう。東大寺の「灌仏会」に祀られる誕生釈迦像は、像高四十七センチの銅造仏像で、「天上天下唯我独尊」というポーズをとっている。金色に輝いて笑っている仏像は国宝である。その頭上から僧侶や参詣者が甘茶をそそぐのである。誕生した釈迦に、九頭の龍が水をそそいで清めたとか、竜王が甘露の雨を降らせたという伝説があり、それをまねて甘茶で祝っているといわれる。ちょうどその時期に奈良に行っておきながら東大寺の花祭りに参加しなかつたことは、賢治にある意味でさらに鮮烈に花祭りの日を意識させたであろうと思われる。

(8) 大正十二年七月三十一日に、賢治は花巻から夜行列車で出発した。花巻農学校の生徒の就職を、樺太の大泊町にある王子製紙の細越健に依頼に行くとというのが表向きの理由であったが、もう一つの理由として、「病死した妹とし子

の靈魂と通信するための旅行」(奥山文幸『宮澤賢治論 幻想への階梯』蒼丘書林、平成二六・二一、一五〇頁)という事情があった。

(9) 日蓮『種種御振舞御書』、堀日亨編『日蓮大聖人御書全集』創価学会、昭和二七・四、九一三頁参照。

(10) 宮澤清六『兄のトランク』(筑摩書房、昭和六二・九)一三三頁参照。

(11) 秋枝美保『宮澤賢治の文学と思想 透明な幽霊の複合体——開かれた自己——「孤立系」からの解放』(朝文社、平成一六・九、三三八頁)は、大正十一年十一月の「天業民報」が相対性理論の継続的で本格的な紹介をしたことを指摘している。「天業民報」の記事は、ドイツで作られた理論の解説映画がわかりやすいのでその映画の内容を紹介するというものだが、これは、いわば幻燈の世界を映し出して光について解説するようなものである。「やまなし」への影響が考えられる。「やまなし」という作品は、現実と非現実が交錯してすべてが揺らぎの内にあるのだが、その中で光だけが死んだり笑ったりよみがえったりしながら絶対性を保つ。そして非空非実の揺らぎの世界をスクリーンに投影し続ける力そのものとなる。

(12) 堀日亨編『日蓮大聖人御書全集』(前掲書)、九一四頁参照。もともと有名な一節といってよく、さまざまな遺文諸本もテキストに大きな異同はない。

(13) 私の手元にある經典の一つでは、「菩提薩婆訶」は「菩提娑婆訶」となっており、「はらそうぎやていばちそわか」とルビが振られている。多くの僧侶の読経を聞いてもそのような発音となっている。賢治のルビには癖がみられる。なお、サンスクリット語では、次のような発音に近いと思われる。paśa śaṃkate bodhi svāha (パー・サム・ガター・ボーディ・スワーハー)。なお、中村元編著『仏教經典散策』(東京書籍、昭和五四・六、一二五頁)によると、『法華経』の原題は、「サツダルマ・ブンタリーカ・ストトラ」とあり、「サツダルマ」は「正しい法(真理)」、「ブンタリーカ」は「(白)蓮華」、「ストトラ」は「経」という意味であり、全体としては「白蓮華のような正しい教え」という意味になる」という。

(14) 賢治の詩に雲の様々な描写が多いことはすでに指摘されている。たとえば、草野心平『「春と修羅」に於ける雲』(天沢退二郎『春と修羅』研究Ⅰ)學藝書林、昭和五〇・二〇所収)には用例が列記されている。

(15) たとえば、分銅惇作『「雨ニモマケズ」——信仰の視座から——』(『解釈と鑑賞』平成七・九)は「雨ニモマケズ」の詩を論じて、常不輕菩薩品の影響を指摘している。また分銅惇作『宮澤賢治の文学と法華経』(水書房、昭和五六・七、二六四頁)には、次のような指摘がある。

この「不輕品」の最後のほうに、「爾の時の常不輕菩薩は豈に異人ならんや、則ち我が身是れなり」とありますが、この言葉を賢治はおそらく深い感動で読んだでありましょう。つまり不輕菩薩として悪口・面罵され、そしてそれは自分の業であると考えて業を畢いおわつて、その功德によつて自分は仏道を成じ、いまお前たちに教えを説いているが、彼の時石を投げつけ悪口・面罵したのはお前達だぞ、と因縁を語られるわけです。賢治にとってこれがどれだけ大きな感動であり、驚きであつたらうかは察するに余りがあります。

このゆえに、賢治は「雨ニモマケズ」を書いて、日常礼拝していた大曼荼羅の中心部を手帳に書写したと分銅は結論付けている。クラムボンもまた、仏や菩薩の頭の背後にある円光を指している言葉かもしれない。罵倒され、石を投げられ、ある意味で殺されても笑っている、そしてまた必ず生き返る常不輕菩薩をイメージしていた可能性もあるであろう。しかし、それはいずれにしてもお釈迦様そのものの姿なのである。

(16) 『法華経』では、以下のように説かれている。「命終之後。得値二千億仏。皆号日月燈明。於其法中。説是法華経。以是因縁。復値二千億仏。同号雲自在燈王。於此諸仏法中。受持説誦。為諸四衆。説此經典故。得是常眼清淨。耳鼻舌身意。諸根清淨。」

(17) 『佐渡聖史劇』(天業民報社、大正一〇・二)。

(18) 宮澤清六『兄のトランク』(前掲書、二二〇～二二二頁)。